北洲

「アルセコ外断熱」拡販

省エネ義務化やZEHにも対応

ドイツの外断熱システム「アルセコ外断熱システム」の日本総代理店である北洲（宮城県黒川郡、村上ひろみ社長）は、設計事務所、ビルダーや工務店に向けた提案を強化する。省エネルギー基準義務化やネット・ゼロ・エネエルギー・ハウス（ZEH）対応などの住宅の高断熱化ニーズも取り込み、同断熱システム販売の売上高を、中期的に今期（2016年8月期）見込みの3億円から倍増させる意向だ。

アルセコ外断熱システムは躯体の外側に標準厚さ80ミリで不燃性の「ミネラルウール・ラメラ」を接着し、その上にベースコート、ガラス繊維のメッシュ、トップコートを重ね、トップコートを左官塗りの表現仕上げとするシステム。断熱材から表面材まで全ての部材が透湿性を有し、RC造・木造、新築・リフォームを問わず施工できる。

需要拡大の要因について北州アルセコ事業部の阿部桂彦次長は「昨今では、国内ビルダーがドイツをはじめ海外の現地や展示会へ行って、その国の住宅の良さや性能を直に目にすることが増えた。そこで使われる建材や断熱材が日本のどこで手に入るかと問い合わせを通じて注文を受ける事例が増えた」と説明する。

「ここ4年で急成長」

同社が独アルセコ社と「アルセコ外断熱システム」の技術提携を結んだのは2006年10月で、当初は採算割れの状況が続いたが「東日本大震災後のここ4年ほどで急成長してきた」（村上社長）ことで黒字化した。同社が供給する新築戸建住宅の約4割に同断熱システムが採用されており、近年はマンションも含む既存住宅の断熱改修用途でも、広がりを見せ始めている。

また、同事業部では、住宅向け以外に官公庁向け物件および公営住宅の断熱改修工事向けへの提案を進めている。コスト負担については同断熱システムがコンクリートの経年劣化を抑えられる点を訴求して理解を得ている。「この断熱システムの採用により、コンクリートの中性化がストップする」（阿部次長）からだ。

新築当初はアルカリ性であったコンクリート外壁は、雨水などにより中性化して劣化が始まる。コンクリートの建物などに同外断熱を施すことで、劣化をストップすることが可能になる。これにより「スクラップアンドビルドせずに済み、公共機関の建物資産が超寿命化できる」（阿部次長）。

同社は今後、設計事務所などに向けたセミナーなどを積極的に開催し、アルセコ外断熱システムの認知拡大に一層力を入れる方針だ。

住宅産業新聞（発行元：株式会社 住宅産業新聞社）2016年6月23日付